

# 論文「障害をもつ子どもの親の『親亡き後』を視座とした心理変容についての研究」

日本心理学会第 67 回大会発表論文集, p.285, 2003

阿部愛子

(日本大学大学院文学研究科)

## 障害者の親, アイデンティティ, 援助

### (問題と目的)

障害をもつ子どもの親の心理については、さまざまな方向から、現在までに内外とも多数の研究がされている。田中・丹羽(1990)や鍾(1963)らは、親が子どもの障害をいかに受容できるかといった研究を示したし、Olshansky(1962)や中田(2002)らは、親がもつ「慢性的な悲哀」についての研究を発表した。また、親へのカウンセリングを通じ、心理的変容のプロセスの事例研究など、多数みることもできる。さらに大江健三郎(1964)に代表される、親自らが出生や子育てを記述し、出版した例が多数あることは特筆すべきである。

現実の問題として、障害をもつ子どもの親たちは、先行き不安な心理状態のまま長年、以下のような理由で、悩み続けている例が多いと指摘されている。(田中, 1998)

- 1、地域生活を希望するが、施設を作り続けるわが国の現状
- 2、罪の意識から体力が続く限り、子どもの世話をし、その結果、自分を納得させて、子どもを施設に入れる
- 3、親子の一体化が、自立(自我確立)を阻む
- 4、問題の抱え込みと家族的危機

一般的には子育てを終え一段落する頃、成人期の障害をもつ子どもを抱えた親には新たな思いが生じ、心理的に追い込まれている場合が少なくない。親としての仕事(ケア)が果てのない仕事に思えたとき、障害をもつ子どもの親たちは何を考えるのだろうか。あるいは、子どもの自立に伴い、親にはどんな思いが生まれてくるのだろうか。自分の死後を意識しはじめるときの親の心理はなど、この分野では研究がまだ十分とはいえない。

以上のことから、筆者は障害をもつ子どもの母親への面接を行い、親自身のライフサイクル(Erikson, E.H., 1964)を総合的なテーマとして捉え、親の思いを探り、時間軸に沿いながら、どのような心理的変容が生じるのかを考察していく。また、「親亡き後」という新しい視点から考察を深めていく。

### (調査方法)

本研究ではまず始めに、知的障害を持つ29歳の娘M子さんの出生から現在までを通して、その母親Aさん(52歳)から主に「親と子どもの心理的自立」について、半構造化面接を行い、逐語録を作成した。

### (事例)

- 1、逐語録を時間に従い、以下のように3分割した。  
出産から障害受容前まで  
受容から40代まで  
40代から現在まで
- 2、概要を表1にまとめた。
- 3、心理・自立・支援の3つの視点が見えてきた。

### (考察)

事例から、障害をもつ子どもへの援助と同様に、親への援助が必要であることが分かった。また、親子の自立へ到るまでの心理変容を以下のように見ることができた。

- 29年間、子どもを育てた。  
子どもが施設を「いや」といえるようにまで成長した。  
その反応から、親が変わった。  
子どもはグループホームでの自立生活をはじめ、地域で関わりができた。  
子どもや地域や自己へ、新たな気持ちをもつ。  
誰のせいでもないと思うようになる。  
この6点に加え、障害をもつ子どもと親とコミュニティの相互作用の影

響とその重要性を基に以下の点をまとめた。

- 1、子どもの自立に伴い、親が自立した個人として子どもをみる視点が生まれるということ
- 2、エリクソンの説(1971)が示唆しているように、ケアを通して親自身が新しいアイデンティティを確立し、自己実現に至る可能性が出てくる。つまり、親が発達していくことが大きな意味を持つということ
- 3、コミュニティ(=地域)の発達が一つの展望を示唆しているのではないということ

さらに、筆者は心理・社会的な視点として、以下の3理論に着目した。Wolfensberger, W.の(1995)価値を引き下げられた人々の生活改善のための「ソーシャルロールパロリゼーション」理論、Schwartz, D.B.(1996)の「コミュニティの中から援助を作り出していくホスピタリティ理論」およびKylén, G.(2000)の示した「人の心理面と身体面」や「物的・社会的環境」などに相互作用する「人の全体像」理論がそれである。これらを障害をもつ人とその親とコミュニティが発達していくための統合ビジョンと考え、今後の展望として位置付ける。

今後これを基に、地域での臨床心理学的援助とコミュニティや行政への提言などを心理臨床家が実践していくことが、障害を持つ人々やその親たちから望まれていると考える。また、そのことは障害をもつ人たちが、親亡き後も不安なく地域で自立生活を継続していくための援助につながると考える。

### (今後の課題)

今後は、これを基に親と子どもの自立を主題にした質問紙を作成し、英国と日本で調査を行う。その中から各5人を選び、半構造化面接を行い、親のアイデンティティの確立および自己実現を主題として心理・社会的調査・研究をすすめていく。

### (引用文献)

- Erikson, E.H. 鍾幹八郎(訳)1971 洞察と責任 誠信書房  
Kylén, G. 尾添和子 山岡一信(訳)2000 ペーテルってどんな人? 大揚社  
Lundgren, K. 大滝昌之(訳)1997 さようなら施設 ぶどう社  
森茂起 1989 ある情緒障害児の母親面接と家族の変容について 心理臨床学研究, 69-80.  
中田洋二郎 2002 子どもの障害をどう受容するか 大月書店  
Olshansky, S. (1962). Chronic sorrow: A response to having mentally defective child. *Social Casework*, 43, 190-193.  
Schwartz, D.B. 富安芳和・根ヶ山公子(訳)1996 川を渡る 慶応義塾大学出版会  
田中愛子 1998 絵はコミュニケーション 燦葉出版社  
Wolfensberger, W. 富安芳和(訳)1995 ソーシャルロールパロリゼーション 入門 学苑社

( ABE Aiko )